

平成27年度COC地域シンポジウム 実施報告書

稚内・宗谷の未来と担い手づくりの展望
— 子育て運動の町における力合わせと大学育ち —

稚内北星学園大学
Wakkanai Hokusei Gakuen University

目 次

ごあいさつ	稚内北星学園大学 学長 齊藤 吉広	1
1. シンポジウム総括	地域教育支援室長 米津 直希	3
2. シンポジウム概要 (講演録)		5
3. アンケート集計結果		33
資 料		45

ごあいさつ

稚内北星学園大学

学長 齊 藤 吉 広



本学は26年度の文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（大学COC事業）に選定され、「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地（知）の拠点整備」というタイトルの下、全学的に地域連携活動に取り組んできました。その柱は次の3つです。

- ① 地域の教育力向上
- ② 観光まちづくり
- ③ 中心市街地活性化

これらのうち、「地域の教育力向上」事業の成果を学内外で共有し、さらに充実させるための課題を明らかにするために今回のシンポジウムを開催することとしました。この事業については、COCに採択される以前からの活動の積み重ねがあると同時に、参加した学生が卒業後に教師としてこの地域で活躍するという結果も残しているという事情が、テーマ選定の背景にあります。

「グングン塾」や「無料塾」、利尻町や豊富町での夏休み学習会支援、猿払村とスカイプで結んでの遠隔学習支援などの取り組みは、支援される子どもたちにとって楽しく有意義な学習機会となるだけでなく、支援する側の学生にとっても教育実践の場として非常に貴重なものとなっています。またこうした活動を計画し継続することによって、本学と各自治体、学校との連携がより深まり、日常の協働関係を深めていくことができたと思います。そしてこのシンポジウムの場それ自体が、相互の連携強化を図る意味を持ちましたし、地（知）の拠点として本学が果たすべき役割についても認識を深めることができました。

この文書は、シンポジウムの内容を今後の実践に生かすことができるよう、当日交わされた貴重な議論を余すところなく記録したものです。また来年に開催する「全国シンポジウム（または全国フォーラム）」でも、「地域の教育力向上」の課題を中心テーマに据える予定であり、その基礎資料としても用いられるはずで、今後の議論の出発点としてこの記録をご参照いただければ幸いです。

1. シンポジウム総括

平成 27 年度 COC 地域シンポジウム所管支援室長

地域教育支援室長 米 津 直 希

本シンポジウムは、地（知）の拠点事業の進捗状況や問題点を共有し、事業の一層の改善を図ることを目的として、事業2年目と4年目に開催を予定しているものの第1回目です。第1回目の今回は、「教育」を軸として開催いたしました。教育を軸としたシンポジウムを開催するにあたって、「本学は地域の教育にどのように貢献できるのか」「地域における大学の教育的役割とは何か」を問う必要がある事を確認しました。こうした問題意識を受けて、テーマを「稚内・宗谷の未来と担い手づくりの展望—子育て運動の町における力合わせと大学育ち—」と題しました。

宗谷地域は歴史的に教育運動が盛んであり、子どものために、地域の教育関係者が方針を同じくして教育に取り組んできました。本テーマは、教育運動の歴史とその知見に敬意を表しつつ、大学がこの地域の担い手を育成することにどのように関わることができるのか、「幼小中高」の後に、いかに大学を接続させることができるのかについて考えたいという思いを込めたものです。

こうしたテーマを受けて、シンポジウムは①学生の取り組みとそこでの学びの報告、②それらを含めた、地域関係者からの本学の評価と期待について語っていただくパネルディスカッション、の2部構成としました。

学生からの報告は、教職ゼミ所属の上浦真之介さん（3年生）、社会教育ゼミ所属の白石拓也さん（4年生）から、それぞれが関わった取り組みを報告していただきました。また、教職ゼミを卒業した江戸勇介さん（現、稚内大谷高等学校教諭）から、本学出身の教員として、大学での学びについての報告をそれぞれいただきました。学生・卒業生からのご報告があったことで、本学の取り組みを具体的にお伝えする良い機会になりました。

パネルディスカッションは、子育て運動に関わるお立場から、大島朗氏（稚内中央小学校校長）に、大学に直接接続する高校のお立場から、山下優氏（稚内大谷高等学校校長）に、教育行政のお立場から、遠藤直仁氏（稚内市教育委員会学校教育課課長）にそれぞれお願いし、本学学長（当時）の佐々木政憲を加えた四氏により行いました。お招きした三氏からは、大学と関わる取り組みのご紹介と、大学への期待やご要望をお話いただきました。佐々木学長からは、COC事業における教育の取り組みについてご紹介しました。その後、フロアからのご発言もいただきました。地域の教育関係

者の方々の目線で本学の活動をご紹介いただき、そのご評価もいただいたことで、本学学生、教職員にとって大変励みになりました。

それぞれのご報告の詳細は、後掲の講演録をご覧ください幸いです。

今回のシンポジウムでは、学生をはじめ、大学の取組みについて積極的にご評価いただきましたが、今後も到達点と課題を明確にしながら、学則第1条にある「地域社会への貢献」に取り組んでいく必要があります。それらがCOC事業を通してより一層加速されるよう、事業推進を行うべきだと考えています。

さしあたって、平成28年度には、全国シンポジウムが開催されます。ここでは、外部の方に宗谷・稚内の教育について語っていただくとともに、宗谷・稚内での活動を全国に発信する場として考えています。その場を機会に、COC事業を通じた地域社会への貢献の到達点と課題が明確化され、その後の取組について、様々なご意見をいただければと考えています。多くの方のご参加をお待ちしています。

2. シンポジウム概要（講演録）

COC 地域シンポジウム

日 時：2015年9月18日（金）18:30～20:30

場 所：稚内北星学園大学 1401号教室

次 第

司会進行 稚内北星学園大学 COC 推進委員会

地域教育支援室長・講師 米 津 直 希

1. 学生・卒業生報告

稚内北星学園大学3年（学校教育） 上 浦 真之介

稚内大谷高等学校教諭（H26年度卒） 江 戸 勇 介

稚内北星学園大学4年（社会教育） 白 石 拓 也

2. パネルディスカッション

パネリスト

稚内中央小学校校長 大 島 朗

稚内大谷高等学校校長 山 下 優

稚内市教育委員会学校教育課課長 遠 藤 直 仁

稚内北星学園大学学長 佐々木 政 憲

司会

稚内北星学園大学情報メディア学部長 斉 藤 吉 広

開 会

○司会 こんばんは。時間になりましたので、平成 27 年度稚内北星学園大学 COC 地域シンポジウム、稚内・宗谷の未来と担い手づくりの展望、子育て運動のまちにおける力合わせと大学育ちを始めさせていただきたいと思います。

開会挨拶

○司会 開会に当たりまして、稚内北星学園大学学長佐々木政憲よりご挨拶をいたします。

○佐々木学長 皆さんこんばんは。遅い時間にこのような形でお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。

本学では、COC といひまして、センター・オブ・コミュニティーの省略ですが、地域における地（知）の拠点として活躍するという文科省の補助事業を得まして、大きく三つの柱で、今、私たちの事業の展開しております。一つは、地域における教育、二つ目は、観光・まちづくり、三つ目が、主に中心市街地における活性化です。

今、私たちの大学で、一番中心になって取り組んでいるものの一つが教育の問題であります。稚内は、子育て運動が長年続いている、本当に伝統のある町です。私は、稚内市へ来て初めて、地域と学校と家庭が一つになって、将来の地域を担う子供たちを育てていくことを学んだのですが、その中にぜひ大学も加えてほしいと、私はずっと思っておりました。そして、学長になってからは、とにかく地域に根差した大学づくりを目指しています。またオール稚内の教育という考えに対して、私たちもその輪の中に入って、少しでも皆さんと一緒に頑張っていきたくて思っています。

学生が地域に出ていっていろいろな活躍をしていますが、地域を育てていくというときに、学生自身も地域によって育てられるということもあります。また、学生が自分たちの活動によって、将来の稚内を担う子供たちを、少しでも一緒に育てていくこともやっております。そういうことをやっている学生の目が本当に生き生きとして輝いていて、私もその点では本当にうれしいなと思っております。また、学生たちが頑張っているそういう姿をぜひ地域の皆さん方にも応援していただければ、私も本当にうれしいと思います。そのようなことも含めまして、私たち大学の教員、職員、そして学生と一緒に、この COC を何とかやり遂げようと思っております。今日は、教育ということテーマにした形で、この地域を挙げた子育ての運動、それを私たちと一緒にやっていきたくて、そのための皆さんと一緒に考える場にできればありがたいなと思っております。

どうぞ、本日はよろしく願いいたします。(拍手)

学生・卒業生報告

稚内北星学園大学 3年 (学校教育)

上 浦 真之介

稚内大谷高等学校教諭 (H26 年度卒)

江 戸 勇 介

稚内北星学園大学 4年 (社会教育)

白 石 拓 也

○司会 それでは、学生と卒業生からの報告ということでやらせていただきたいと思います。

私、本日司会を務めさせていただきます、今回の地域シンポジウムの責任者も務めております米津直希と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

(拍手)

真剣ではありながらも、リラックスした雰囲気に参加していただければと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、学生のほうから発表させていただきます。

最初に教職ゼミの所属で3年生の上浦真之介さんから、地域教育支援活動の紹介と、そこで学んだことについて、報告をしていただきます。よろしくお願いいたします。

○上浦氏 稚内北星学園大学3年、教職ゼミ、ゼミ長、上浦真之介です。活動報告をさせていただきます。よろしくお願いいたします。(拍手)

まず、ゼミでのこれまで半年間の大きな活動が四つあります。グングン塾と無料塾、豊富学習支援、鬼志別・浅茅野遠隔授業、この四つがございました。

まず、一つ目のグングン塾ですが、稚内の各小学校に学生が行き、指導員の助手として学習の支援をさせていただきました。毎週火曜日、現在も継続して続けております。

続きまして、無料塾。中央商店街にあるまちラボを使い、子供たちに対して無償で学習や課題を支援させていただきました。期間が8月3日と5日から7日間の8日間させていただきました。6日には、東地区学童の子供たちが参加していただきました。無料塾はこれからも続けていく予定ですが、まだ検討中でございます。

続きまして三つ目に、豊富学習支援をさせていただきました。小学生、中学生に、夏休みの宿題をメインに学習を支援させていただき、豊富小学校、豊富中学校、兜沼小学校が参加してくれ



ました。期間が8月12日から8月14日の3日間です。これは学習支援以外にも、豊富の教育委員会の方々が用意していただいた中学生とのレク、スラックライン体験、そして校長会、教頭会、そして教育委員会の皆様方とバーベキューなどをさせていただきました。児童生徒との交流で勉強になったのはもちろんのこと、大学生としてよい思い出の一つになりました。

こちらが、小学生に勉強を教えている写真です。こちらが、先ほど言った教育委員会の方々とバーベキューをしている写真です。こちらが、中学生との集合写真になります。

四つ目に、鬼志別と浅茅野の遠隔授業です。9月12日に第1回目の遠隔授業をやり、毎週土曜日、第4回までやる予定であります。明日も土曜日なので、遠隔授業をする予定であります。

遠隔授業では、機械を通して授業するのでトラブルがとても多いのですが、その反面に、子供の興味を引くので、とても楽しい授業になっています。

こちらが遠隔授業の風景です。Skype というものを使って、こちらの学校と鬼志別、浅茅野の学校に画面を通じて授業を教えています。

これらの活動を通し、さまざまな貴重な体験をしたことで、教師として必要な指導力や子供とのコミュニケーション能力が少しずつ向上していると私は感じています。ゼミに入り約半年となりましたが、まだまだ実力不足なので、今の4年生の皆様方や自主ゼミに参加していただいている2年生の力を借りて、ゼミ全体でこれからも地域教育活動を含めて頑張っていきたいと思いません。

ご清聴ありがとうございました。(拍手)

○司会 ありがとうございました。

続きまして、平成26年度卒業生で、現在、稚内大谷高等学校教諭の江戸勇介さんから、稚内北星学園大学出身の教員としてご報告をいただきます。よろしくお願ひします。

○江戸氏 こんばんは。昨年こちらの大学を卒業しまして、今年から稚内大谷高等学校の教学課で教員として勤務させていただいている江戸勇介と申します。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。(拍手)

すごく緊張しているので、何をしゃべっているのかわからなくなる場面もあると思います。しかし一応原稿も用意してあるので、そちらも見ながらになってしまいますが、話させていただきます。



稚内北星学園大学出身の教員としてということで、本日は、教員になってみて大学で学んだことがどう生かされているかということと、稚内の大学で学び、稚内の学校で働いてみてどうかということについてお話しさせていただきたいと思います。

4月から早速学校の現場で働かせていただいておりますが、毎日がすごく失敗の連続で、ほかの先生方に迷惑をかけてばかりなのですが、日々新たな発見もたくさんあり、とても充実した日々を過ごさせていただいております。

まず、そこで、教員になってみて大学で学んだことがどのように生かされているかということに関してお話しさせていただきます。

稚内北星学園大学の教育課程では、先ほど上浦さんのほうから報告ありましたグングン塾の学習支援や、昨年私も活動に参加させていただいた利尻島での学習支援ボランティアや猿払の浅茅野小学校の遠隔授業というような、本当に生身の生徒を対象にした教育的な学習支援をさせていただく機会はたくさんあり、そういった教育に携わる経験ができて、そのことが、今教えるということだったり、伝えるということをして仕事としている私にとって、生徒だったり児童に教えるということに今すごく生きています。

これは、私たちにとって教育的な活動や経験できるメリットだけでなく、高校側の支援していただいている側にとってもメリットもある、とても効果的な活動だと思うので、私はこれからも大学がそういった活動をしてほしいと思いますし、大学にもこういう協力してほしいという要請もたくさんあればなと思っております。

また、指導案の作成についてなのですが、大学時代にも数々の指導案作成作業もさせていただいておりましたが、数学科の担当の先生や、教育課程の先生に指導案の作成作業を指導していただいたり、実際にたくさんの指導案をつくっていったりしました。稚内大谷高校では9月の下旬から、主に中学校3年生を対象にした学校開放見学会というのを1週間程度行っているのですが、その期間の全授業の指導案を作成するというのもやっています。今ちょうどその指導案作成作業にも取り組んでおり、大学での指導案作成が今すごく生きていて、大変ではあるのですが、苦になっているということは全然なく、大学での先生方の指導などたくさんの経験が今、指導案作成作業にもすごく生きているのが現状です。

また、本当の学校現場で学ぶことというのを、大学で学ぶことは限界があるのですが、そういった経験もできたので、こちらの大学の教育課程ではすごくいい経験をさせていただいたと思っています。

しかし、本当に学校の現場で同じシチュエーションであったり同じ状況でこういった対応をしなければならないというものもあると思うのですが、その場に応じた対応もしていかなければい

けない部分もあると思います、本当にさまざまなことにチャレンジし、いろいろな人とかかわっていく中で、目上の人とのかかわり方であったり、困難にもチャレンジしていくことで、その場その場で何をしなければならないのかというのを自分で考えることも大切です。

二つ目の、稚内の大学で学び、稚内の学校で働いてみてということに関してですが、私自身は現在高校のほうに勤務しているということもありまして、せっかく地元このようなすばらしい大学もあるので、大学の宣伝や、大学とのパイプをつくっていったらなというふうにも考えております。

また、家庭の事情で地方の大学には行けないが、大学でしっかり学んで、将来に生かしたいという人も少なからずいると思うので、この大学では、地元学生に対する金銭的なサポートも厚いと思います。それらの点で非常にこの大学は魅力的だと思っているので、生徒たちにはそういったことも伝えていったらなと思っております。

私自身が教員ということもありますが、このような小さな町で、教員免許を取得することもでき、そして働き口もあります。そういったすばらしい環境もあるので、稚内で育った人が稚内で学び、稚内で教育活動を展開していくということに私自身すごく意義があると思っています。教育関係だけでなく、まちづくりなどの教育以外の活動であっても、稚内で育った人が稚内で学び、稚内に還元していくということがもっともっと広がってほしいなと思っています。

そして、この大学でもまちづくりや若者の活動を活性化していく担い手も育成していると思いますので、この大学の卒業生、在校生でどんどん稚内を盛り上げてほしいなと思います。

つたない説明ではありますが、これで終わります。ありがとうございました。(拍手)

○司会 ありがとうございました。

江戸さんは、大変頼りになる先輩としてとても活躍してくれていました。今日はとても緊張していたようです。ありがとうございました。

最後、社会教育ゼミ所属、4年生の白石拓也さんから、第九市民合唱団とまちづくりということで、取り組みを報告していただきます。よろしくお願いいたします。

○白石氏 皆さんこんばんは。私は、稚内北星学園大学4年の白石拓也と申します。

私が今回報告させていただくのは、私はドキュメンタリー映像の制作を行っていきまして、その件に関して報告させていただきます。

私がまず今回題材にしたのが、5月16日に行われた札幌交響楽団の定期演奏会に市民がベーターヴェ



ン交響曲第9番の合唱を行うということで、それについて取材させていただきました。

まず、市民合唱団の説明をさせていただきます。市民合唱団は、第9を演奏するために集まった稚内市民約240名からなる団体です。この240名の中には、稚内市から集まったと先ほど申しましたが、利尻島の合唱のグループや、今は地方、本州などにいる、少し前まで稚内に住んでいた方なども集まった合唱団で240名という数が集まりました。

今回、ドキュメンタリーをつくる経緯として、最初に稚内市役所さんから教育ビデオの委託がありまして、そこで映像を納めるということで、それだったらドキュメンタリー映像もつくれるのではないかと思い、挑戦してみました。

つくったということの証明として、ちょっと映像を見てもらいます。

(映像上映)

○白石氏 ありがとうございます。あともう一つ、本番の映像を少し見ていただきたいと思います。

(映像上映)

○白石氏 お時間の関係でここまでさせていただきます。

今回、私たちが作りましたドキュメンタリーは、YouTubeのほうでも見る事ができるので、お時間あるときにぜひ見ていただけたらうれしいです。

口頭のほうに戻るのですが、制作後、指導者を訪れてということで、今回の合唱の発表が終わった後も、その参加者の方から町なかで声をかけてもらうことが増えたと話していました。このことから言えることとして、合唱のイベントのときに形成されたつながりが維持されていることがうかがえます。また、参加者の中では、また合唱をしたいという意思を持った方も多いということで、参加者による自発的な意思が今回のイベントで構築されたのではないかと考えます。

今回、つながり、自発性をなぜこのイベントで構築できたのか、これは参加者の回答、インタビューの中でおっしゃっていたことがほとんどなのですが、指導者、高井先生の力量や、長期間の練習、練習期間としては約半年間で、週2回という結構1回の練習時間が2時間ぐらいと時間は短いのですが、トータルすると結構長時間の練習になっていました。参加しやすい雰囲気づくりや、イベント終了後の達成感、充実感があり、そのつながり、自発性が構築されたのではないかなと、参加者の方々はおっしゃっていました。

報告者の見た成功の理由として、合唱に対する意識は参加者の皆さんからとても強く感じられたというのが、私の目線から見た成功の理由のまず一つです。次に、やはり高いモチベーションということで、集団で一つの場所をつくり上げる目的の共有ができたからこそ、第九の今回の合唱祭が成功したのかなと考えます。一般的な合唱祭というのは、一つのグループのものではなく、

大体四つから五つのグループで一つの合唱祭を行うということが今の主流であり、そのような形が多いので、今回一つの合唱団が一つのイベントで歌うということ自体が特殊です。やはりそういう場面だからこそ皆さんが主役になれる空間をつくることができたのが成功の理由だと考えます。

これでスライドは終わりなのですが、最後に私の感想として、今回そのイベントにかかわらせていただきまして、イベントを通して、客観的に人と人がつながっていく様子を見ることができました。それはドキュメンタリーの中でうまく表現できたかという点、やはり私の力不足な面もあると思うのですが、今回の経験を生かして、これからもまた何か映像にできればと考えています。

ご清聴ありがとうございました。(拍手)

○司会 ありがとうございました。

なお、今、力強いことをおっしゃいましたが、今のドキュメンタリーは、「地方の時代」映像祭、市民・学生・自治体部門にて入選いたしました。(拍手)

入選は2回目です。おめでとうございます。

ありがとうございました。

パネルディスカッション

パネリスト

稚内中央小学校校長	大島 朗
稚内大谷高等学校校長	山下 優
稚内市教育委員会学校教育課課長	遠藤 直仁
稚内北星学園大学学長	佐々木 政憲

司会

稚内北星学園大学情報メディア学部長	斉藤 吉広
-------------------	-------

○司会 それでは、続きましてパネルディスカッションに入りたいと思います。

パネラーと司会の方は前にお願ひいたします。パネルディスカッションの進行につきましては、COC 事業責任者の斉藤教授にお願ひいたしております。

それでは、よろしくお願ひいたします。

○斉藤教授 皆さんこんばんは。このパネルディスカッションの司会を務めさせていただきます。本学情報メディア学部、学部長をしております斉藤です。よろしくお願ひいたします。



最初に、4人の方をご紹介します。この後1時間をめどにして、お一人15分という短い時間で大変申しわけないのですが、それぞれの立場から、大学と地

域の関係というものについてご提言をいただきまして、その後、20分ほど自由討論という形にしたいと考えています。

順に紹介いたします。

稚内中央小学校、校長の大島朗様です。

○大島校長 大島です。よろしくお願ひします。(拍手)

○斉藤教授 稚内大谷高等学校、校長の山下優様です。

○山下校長 山下です。(拍手)

○斉藤教授 稚内市教育委員会学校教育課、課長の遠藤直仁様です。

○遠藤氏 遠藤です。よろしくお願いします。(拍手)

○斉藤教授 本学学長、佐々木政憲です。

○佐々木学長 改めまして、どうぞよろしくお願いします。(拍手)

○斉藤教授 それでは、今ご紹介した順に発言をいただきます。

まず、大島様から、子育て運動の視点から、あるいは小学校校長の立場から、大学とのつながりや、まちラボについてのお考えなどをお話しいただきます。よろしくお願いいたします。

○大島校長 改めましてこんばんは。稚内中央小学校、大島と申します。よろしくお願いします。

まず、この場をお借りして、常日ごろ、学校教育にご支援、ご協力いただきまして、本当にありがとうございます。子供たちはすくすくと育っているということを私の立場から、学生の皆さんの力を借りながらこんなふうに育っているということをお話しさせていただきたいと思っています。



私は今、教員 31 年で、その約 3 分の 2 以上、稚内で教員をさせていただいています。ちょうど今日、もう多分、この時間になったら着いていると思うのですが、本校が修学旅行に行っていて、先ほど電話したら、バスの中のものすごく盛り上がった声が聞こえて、楽しい修学旅行だったのだろうと思って、こちらのほうにちょっと後ろ髪を引かれながら来たところです。

きのうの朝、出発して、今日帰るということでは、1泊2日なのですが、朝、子供たちには、小学校で一番の思い出は修学旅行ですという話をしながら、いい思い出をつくってきてくださいねというふうに送り出しをしてきたところです。

でも、子供たちの今の状況はなかなか厳しいものがあるのです。家庭状況では、離婚率が高い稚内ですので、家族の状況も子供にとっては全ていい状況とは言えないお子さんもいます。経済状況も要保護だとか準要保護を受けている家庭もたくさんいます。しかし昔に比べると子供たちは素直かなというふうに感じています。私が青年教師だったころ、まだ青年のつもりなのですが、担任だったころ、子供たちは学校外でいろいろなことをしてくれました。その対応で保護者の方と連携しながら、地域の方の力を借りながら進めてきたのですが、今の子供たちは、どちらかというと素直で、内弁慶なのか、きちんとできる子は多いなというふうに思っています。これが社会の趨勢なのか、私たちがそういう子供に育てようとしているということではないと思うのですが、こんな状況もあるかなというふうに思っています。

ちょうど今日、全道へき地複式研究大会というのがありまして、偶然なのですが、私は、先ほどの遠隔授業を行っている浅茅野小学校のほうに行ってきたのです。報告を聞かせて頂き、そう

ということがあったということに改めて感じました。浅茅野小学校の子供たちは、小規模校なので、研究の中では、コミュニケーション能力をつけるということで、今日は、体育と音楽の授業を公開していましたが、なるほど学生の皆さんとそういうつながりもあって、子供たちはあのような姿になったのかなということに改めて考えていました。そんなつながりを持ちながら子供たちが頑張っていたのだなということにちょっと感じたところです。

私は、ずっと稚内に住んでいるのですが、生まれは利尻なのです。小中学校は枝幸で、高校は稚内です。40年ぐらい前は、稚内に大学というのはありませんでした。ですから、自分の先輩、小学校のときは中学校、中学校のときは高校があったのですが、高校になったときに自分の先の姿というのは一つ飛び越えて、教師になろうと思っていましたので、すぐいきなり教師のイメージを持っていたような気がします。もし大学があったら、きっと大学生という姿を憧れの姿として持ちながら、ワンクッションあって、自分の将来をつくれたのかなという気がしています。それはこの後お話ししますが、本校でたくさん学生の皆さんにかかわってもらっている子供の姿から、改めて自分のことを振り返ってみて感じたところです。

それで、今の子供たちの状況も少しお話ししましたが、未来を担う子供たちを育むためには、学校、家庭、地域社会、大学も入ると思うのですが、これまで以上に連携を図って、何よりも一致点を大切に、協力、共同の力を大きく伸ばしていくという、まさに子育て運動の質を高めるということが大事なのではと感じています。

それで、まちラボのことを私の立場からはぜひ報告をさせていただきたいと思っています。無料塾をされていたので、子供たちには、担任の先生方を通して宣伝をしました。ただ、申しわけなかったのですが、なかなか子供たちは知らないところに行くのが苦手なのです。例えば社会科見学で、みんなで行って、ここがそうですよと言われてたら、もしかしたら行きやすかったのかなと反省をしています。

そんな中で、ある2名の女の子が、ほぼ毎日行っていたということがありました。その女の子のうちの一人は、学級の中でちょっと周りとは馴染めないお子さんでした。4月になってからちょっとそんな傾向が出てきて、関わりをどうつくったらいいかと、ずっと学年部会、それから学校の中でも支えていこうとしていたところだったのです。その子が、私がちょうど学校の裏のハウスに水をやっているときに、自転車で通って、あの二人が行ったなと思ったら、私の姿を見つけて戻ってきたのです。「校長先生」と呼びとめるのです。「どこ行ってきたの」と聞いたら、「まちラボ」と、すごくにこにこしていました。「まちラボに行ってきた。大学生と勉強してきた」「そうかい。どうだった」と言ったら、「すごく楽しかった」とにこにこしながら言っていました。私たちの力不足でその子にとっては、1学期はもしかしたら学校は余り楽しいところではなかった

と感じたかもしれませんが、夏休みのそのひとときを、しかも友達と一緒にいったということではすごくいい時間になったのではないかなと思いました。

もう一人のお子さんのお母さんと昨日たまたま会って、そのまちラボの話をしたら、「先生、すごく楽しかったって言っていたわ」とおっしゃってくれて、もしかしたら訪問したお子さんの人数は少なかったのかもしれないのですが、その子にとっては非常に貴重な時間だったかなと思っていますし、この後もいろいろな機会を通してあの場所は使わせていただきたいなと思っています。

あのオープンのときがすごくよかったですよね。学生の皆さんがたくさんいて、稚内にこんなに若い人がいるのかというぐらい、ちょっと稚内らしくない雰囲気と言ったら怒られるかもしれませんが、若い人がたくさんいるのだなといういい環境、そんな雰囲気を発信していただいたのかなと感じています。

あともう一つ、大学のほうには、グングン塾でお世話になっております。皆さんご存じだと思うのですが、稚内市教育委員会の事業です。どうしても稚内の子供たちの学力の形成を考えると、3年生からつまずきが大きいいということなのです。1、2年生は少人数指導をしていただいています。それで、3年生になると学習内容が物すごく難しくなるのですよね。ですから、そこを研究所のほうで分析をしていただきながら、学校のほうに支援をしてくれるということでの放課後グングン塾です。

子供たちにとっては7時間目です。6時間目が終わるのが3時45分です。その後ですから、高学年であればまだちょっと体力的に余裕があるのですが、3、4年生ですから大変です。先日の水曜日も5時間目体育で、外で走り幅跳びをして、戻ってきて、6時間目はないのですが、6こま目にグングン塾をしていました。最初は、6時間目、7時間目、子供たちができるかなと思っていたのですが、本校は8割ぐらいの希望者がいます。中にはおうちの人に行きなさいと言われて渋々来ている子もいます。でも、そのうち学ぶことが楽しくなって、やっぱり行こうと。それから、その塾の時間が終わって、もう4時半近くになるのですが、にこにこしながら帰る姿がありました。

あと、これもおととい、ある子が、その子は勉強が苦手で、今の学年の学習もなかなかうまく習得できないのですが、帰りにたまたま会ったときに、12ページも頑張ったと言っているのですよね、小さいドリルなのですが。子供たちが頑張って、そんなことを学びたいという気持ちを大人が支えてくれているというところが私はすごくありがたいなと思っています。

春休み中、グングン塾があったときに、学生さんが来ていただいて、その前の学年で指導してくれていたのですが、飛びつくのです。その大学生の先生に「先生」って。学びたいという気持

ちもちろんあるのですが、大学生に対する近い関係で、もちろん指導してくれる先生についても同じように先生と思っているのですが、学生さんに対する気持ちというのはまた違った意味での親近感を持っているのではないかなと、その場面を見ても思いました。

子供たちは、遊びの中で学ぶのだなと思います。遊びというのは遊具で遊ぶとかということもそうなのですが、そういう子供の心の中での遊び感覚の中で、作法なんかもたくさん学ぶところがあるなということでは、まちラボもそうですし、グングン塾もそうです。そういう子供たちの授業以外で、遊び感覚の中で学ぶということがすごく大きいのではないかなと私は感じています。心を育成すると学力まで伸びていくということでは、そういう人たちの力も借りながら進めていかなければならないなと感じています。

先日、北海道の小学校長会の研究大会があって、全道の校長先生たちの前で全国小学校長会の会長さんがこんな話をしていました。今の小学校1年生の中学校卒業時、15年後、2030年は、日本は65歳以上が3分の1になります、生産年齢は58%になると。数字を言われるとちょっとどきっとしました、小学校の校長として。1年生が中3になるときの世の中のことも考えて学校教育を進めなければならないなと思っています。

世界で日本の占めるGDPは5.8%から3.4%になる。成人の85%が現在存在しない職業につく。今の仕事の50%が自動化される等々、私たちが目の前の子供たちを考えたときに、もう少し先の、今の1年生が中学校3年生になったときにどんな世の中になっていくのか、そのことを見据えた教育活動を家庭、地域の皆さんとつくっていかなければならないのかなと思っています。

稚内中央小学校は、北地区と言われています。稚内中学校と連携しながら今進めています。最近幼稚園、保育園ともつながりながら進めているのですが、北地区フェスティバルというのがあるんですね。稚内はどの地区でもそういう夏祭りをしているのですが、特に今年の北地区は高齢者の方がたくさん来ていただきました。いつも学校、子供たちは支えてもらっている、助けてもらっているという感覚があるのですが、その姿を見て、私は子供たちが高齢者の方を支えるとか、共生するとか、そんな姿が今後必要なのだなと。子供はいつも支えるのではなくて、高齢者の方も子供たちが支える、そんな世の中をつくっていくということが必要なのかなと思っています。

これから社会で子供を育成するためには、子供が本当に自分の経験を駆使して問題解決をするような、他者と問題を共有して、自分の学びを進めていくような、そんなつなげることが大事なのかなと思っています。

手前みそですが、昨年度の卒業式のときに、1年間の最後の卒業式でこんな話をしました。少しだけ読ませてください。「皆さんは、二つの力を身につけることができました。その力とはつな

がる力であり、つなげる力です。つながる力とは、助け合い、学び合いながら物事をなし遂げる力です。協力できる力です。つなげる力とは、みずからの学びを生かし、新たなものをつくり出す力です。また、みずからの学びを他者に伝え、届けていく力です。つながる力、つなげる力はこれからの稚内、日本をつくっていくためのキーワードだと思っています」。

最後です。今、地方創生ということが叫ばれているのですが、子供たちが地域に人材として残って地域を支えなければ、地方は生き残ることはできないと思っています。今の小学生もここに参加されている大学生になって、地域に愛着を持って、関心を持って、地域で自己実現を図るとともに、地域に貢献することを喜びとする、そんな子供に育てる必要があるなと思っています。そのためには、学校、地域、家庭がつながることが前提だと思っています。私は、そのことが稚内型の地方創生と考えながら、今後も多くの市民の方、特にこの後、小学校で、中学校、高校、大学とつながりながら、子供たちの成長と発達を促していきたいなと思っています。(拍手)

○齊藤教授 まちラボについては、まだまだ工夫が足りないなと思っていたところで、そういった存在意義もあるのだなということで大変うれしいお話をいただきました。ありがとうございました。

続きまして、山下様より、高大連携や高大接続の視点から、また、高等学校校長の立場から、大学の役割とか大学への期待などをお話いただけます。よろしくお願ひします。

○山下校長 こんにちは。稚内大谷の山下でございます。

パネラーということでございますが、私はパネルにボールをぶつけるのは得意なのでありますが、どうもこの場にいるのはいかなものかな、人前でしゃべるのは大嫌いなのです。こんなのが教師になり、こんな男が校長ですから、私は、有能な、雄弁な教員を集めておかなければならない



ということです。稚内北星大学は、先ほどの紹介されました江戸先生のような立派な先生を輩出する大学であります。どうぞよろしくお願ひいたします。(拍手)

実は私ども、私学稚内大谷、そして私立の稚内北星学園大学でありますから、私は学長さんとよく生徒募集が命だという話をします。生徒募集が命ということは、いわゆる教育活動を充実させ選ばれる学校づくりをしていくかということです。そのためには、建学の精神、これ、私学の命ですから、「先生、建学の精神というところでお話ししませんか」といった時期が一時期ございました。稚内北星学園大学の学生玄関を入りますと、建学の精神が壁にどんと張りつけてあるという状況で、こちらの建学の精神は、『地域に貢献する人材の育成』とあります。これそのものがCOCの目的に合った建学の精神でありまして、この地域に貢献する人材の育成、そういう大学が

そばにあるということで私は非常に勇気づけられる。私どもの学校の建学の精神は何かというと、『仏教精神を基調とした全人教育を行い、世の光明となる人格を養成する』人間づくりなのです。そして、大学においては、地域における人材づくりと、こういう結びができますので、この私学・高大連携というのは非常に重要な我々のキーワードになると思っております。

さて、この私学、高校も大学も生徒がいなくては運営できないという問題は、公立高校とは違いますので、切実な問題であります。だから、どう教育活動を、生徒・学生から選ばれる教育活動をするかというのが生命線にありますので、我々もこのことには非常にナーバスになり、日々、工夫をし、先生方と議論しているところであります。そういう意味では、この稚内というのは、非常に難しい地域にあります。昔は最北端なんていうことで、北の果てというイメージが非常によくないと、最近ではてっぺんという言葉を使う。私は非常にこのてっぺんが好きで、よく本州のほうで会議がありますと、自己紹介するときにてっぺんの町から来ましたと、こう言うのですが、先生方は非常に興味深く顔をぐっと上げて私を見てくれるのですが、てっぺんという町、てっぺんに上りつめるというイメージ、これを大事にしていきたいと思っているわけであります。

しかし、このてっぺんの町であります、どうも背中に何か背負っているような感じがして、前がとても見えない、不安ということでもあります。しかし、最近の稚内を見たときに、見える稚内と見えない稚内、この両面を私は気にしているところであります。

見える稚内とは、産業的には、基幹産業の水産、酪農、そして観光があります。しかしながら、残念なことに、一次産業と言わざるを得ない状況がまだあるわけです。昔は明らかに一次産業でありました。しかし、今、付加価値をつけるべくいろいろな工夫をして、加工業は勢い頑張っているようではありますが、まだまだ足りない状況にあります。観光においてもそうです。ただ見る、食べる、帰る。天気がいいか悪いかが左右される。こういう状況でありますから、やはりそれにどう付加価値をつけるかということにおいては、観光であれば体験であるとか、いろいろなかわりを持って、もっともっと工夫ができるだろうと。水産においては、これだけすばらしいものがとれる状況の中にあって、どういうふうにつ加価値をつけるか。また、育てる漁業というものも考えていかなければならない。酪農においてもそうです。バターなんかは、本州であつという間に品切れです。びっくりする状況であります。バターは今貴重な製品として扱われる。しかし、現場では、安くて、つくるだけ赤字になるとかという、何とも歯がゆい状態があるわけですが、そういう産業についてしっかり研究する、このことが稚内はできていないのではないのか。

それから、もう一つはやはり、高齢化社会であります、稚内は29.1%の高齢化率。29%といえますと、超高齢化社会と言われます。では、そのお年寄りをどうするの、福祉施設つくればいいのか、それではとどまらない。やっぱり医療の手が、その周辺にしっかり安心する医療の手

がなければ、お年寄りも安心してこっちはいられないということです。私たちができるのは、ホームヘルパーを育てる。しかし、介護福祉士を育てることはできません。この問題をどうするか、稚内においては重要な課題です。

そんなことを考えていったときに、もう一つ、稚内大谷として気になる部分は、稚内商工高校が廃科になった機械科、電気科という問題も企業人は非常に嘆いております。私も学長と同じく南ロータリーの会員でありまして、企業人からよくいろいろなことをお聞きします。「電気工事士、全くいないのです。困っています。稚内大谷何とかしてくれないか」と、私ども普通科でありますから、いやいや、とてもとてもそこには届かない。しかし、困っているのであれば、何かできないかということで、そのことに頭をひねらなければいけない状況がある。いわゆる稚内大谷は、昭和38年に稚内市及び稚内市民の要望、要請でできた市民立的学園でありますから、そここのころに無視して運営はできない。今、公立稚内高校、私学稚内大谷、1校ずつでありますから、我々の責任は非常に大きい。そのことで、我々にできることは何かということで、電気工事士2種免許の取得講座を展開して、この10月の月上旬に一次試験があると。そこまで来ております。

そういう技術の担い手を育てるといってもこの町はやっていかなければならない。いわゆる市長さんは、人口の問題を市政の重要課題として、いろいろ地域創生を含めたプロジェクトをつくって、市民的な会議を起こしてやっている、非常に私は期待しております。

それで、教育というのは、ずっと私も見ていると、小中高大、縦の連携は昔からやっております。しかし、ここで終わってしまったのでは、これから先の見えない稚内というところの問題を解決する、それから見える稚内を維持するということは難しい状況があると。だからこそ、今、教育は横の連携が必要になってくるだろう。縦糸は小中高大の教育連携、横糸は地域連携、企業連携をやっていかなければいけない。地域の声、企業の声を知りたい。聞いて我々は何ができるか。何とか稚内高校と稚内大谷とで、そういう水産や酪農に関して製品化する、研究できる人材を何とか高校まで抱える、3カ年抱えて、そしてしっかりと地域の郷土愛を育て、そして大学、専門的な学習に取り組んでもらう。そうすれば、Iターンで稚内に戻ってくれる、戻ってこられる状況はつくれるのではないかと、それとあわせて、地元にある、この地域に貢献する人材の育成という建学の精神に基づく大学へ進めて、そして具現化を図ってもらう。そして、まちづくりを教育がこれからやらなければいけない。これは高大の連携ではない。中学校の教育をなくして、このことに継がろうと。中高大、はっきりとこれを打ち立てて、まちづくりという観点を教育の現場にすり合わせていかなければいけない、そんなことが最近非常に気になっているところであります。

そういう意味では、まず、我々のできるところということで、高大の連携の一つに、教職員の採用というのにも意識しております。それで、以前に平賀という先生が稚内北星学園大学を卒業されて本校に来まして、その後東京都の採用試験に受かりました。それから、札幌の龍谷高校の採用試験も受かって、どちらを選ぶかということで、最終的には今龍谷高校に行っているかと思えます。更に、卒業生で片山先生が本年3月までおりました。道の採用試験を受けるということで、3年間預かり、道の採用試験に受かりました。今、旭川西高校の教員として出ております。みんな、それぞれに会うごとに先生ありがとうございます、いい勉強をさせてもらいましたと言っただけ。それは、やはり大学にしっかりとした支えがあるからだなど。やっぱりここの卒業生の姿勢というのは非常にしっかりしております。我々、仏教系の学校でありまして、『縁起の道理』という法語があるのですが、我々、やはりこうやって今お話しできるのも何かのご縁だと。ご縁というのは本当にとついでにございまして、その縁というものがしっかりと稚内北星学園大学の学生さんに備わっていると。卒業しても大事にしている。その縁、いわゆる人のかかわりというものを大切に歩いていっているなというようなことをございます。

そういうことからして、うちの教員も、最近では北星学園大学の教育ということに非常に興味も高く持っておりますし、うちの先生が持てば、そのことが父兄に伝わるわけですから、その連携をさらに色濃くして、私は地域の人口の問題もそう、社会の発展もそう、全部教育に解決策の一端があるような気がしております。その教育連携を今後しっかりと、稚内北星学園大学とスクラムを組んでやっていきたいなというような気持ちを持って、私の発表とさせていただきます。

ありがとうございました。(拍手)

○齊藤教授 今、経済界とか文科省でも、大学で職業教育をやれというような動きがある中で、横の連携ということで、まちづくりのためにどういう教育内容を提供する必要があるのかということで、大学としても検討しなければいけないと思っています。そういった話も改めて気づかせていただきました。ありがとうございました。

続きまして、遠藤様より、教育行政にいらっしゃるお立場から、大学の役割とか大学への期待などを語っていただきたいと思います。よろしくお願ひいたします。

○遠藤課長 学校教育課の遠藤です。よろしくお願ひします。

本日お集まりの皆さんにおかれましては、日ごろから、それぞれの立場で市の教育行政にご支援いただきまして、厚くお礼を申し上げます。

私は、教育については、勤め始めたころ、社会教育課に



4年半ほどおりました。当時は、青少年教育の担当で、子ども会だとか補導センター、当時は社会教育のほうで学童保育所なんかも担当しておりました。現在、学校教育課では、学校教育課が6年目ということで、教育とは10年以上関わりを持たせてもらっています。

現在、稚内市では、小学校が12校、中学校が8校設置されております。約2,600人の子供たちが通っております。学校教育課のほうでは、子供たちが安心して義務教育が受けられるような、そんな教育環境の充実を図るような、そんな仕事をしているところです。どうぞよろしくお願ひします。

それで、私のほうからは、現在、教育委員会と大学とがどのように連携を図っているかという、そういったお話を少ししたいと思っています。

地域の持つ教育力を有効に活用して、教育分野で相互の充実を目指す、そして学校教育のさらなる充実を図るということで、平成15年からになります、学生ボランティア派遣事業というのを実施しています。これについては、小中学校における学習支援など、北星学園大学の学生の皆さんの力を借りるというものです。例えば、コンピュータークラブでの指導だとか、算数の授業支援、また、夏休みだとか冬休みの数学、英語の学習会での学習支援、また、学校によっては部活単位で土曜授業なんかも行っていますが、そういった際の算数を、部活単位で行う土曜授業での算数を中心とした学習支援、また、先ほどからいろいろ話が出ている、教育委員会で実施している放課後学力グングン塾での協力だとか、市内の各学校、教育委員会もそうなのですが、授業以外にも子供たちへの学習機会の場合というものを工夫して設けておりますが、そういった場面に学生の皆さんの派遣希望というのが本当にたくさんあります。

学生の皆さんにとっては、本来の勉強の合間を縫っての活動で、なかなか小中学校の希望する日や時間が合わないということ、また、ほかの活動もいろいろやっているということで、全てに協力をいただくということにはなかなかありませんが、本当に忙しい中、可能な範囲でこれまで協力をいただいています。本当にありがとうございます。

それで、私のほうから、グングン塾の話を少ししたいなと思います。先ほどから上浦さん、江戸さん、また大島先生のほうからいろいろお話がありましたので、詳しいことはお話しませんが、グングン塾についても、25年から始めているのですが、26年度、昨年からは、6月から10月の間、毎週火曜日、市内4校にそれぞれ二、三名ずつ、10名の学生の皆さんに登録していただいて、毎回それぞれの学校に二、三名ずつ子供たちの学習支援をお願いしています。

あと、グングン塾のほかに、今、市のほうでICT教育の推進ということで進めているのですが、これも昨年度から、大学の協力をいただきながら、教職員向けのICT機器活用研修会ということで3回開催させていただきました。これには、延べ140名近くの先生方の参加もありました。ICT

機器活用の基本的な考え方と現場での活用だとか、あと ICT 機器の活用に向けて機器の機能を学ぶだとか、本当に先生方、大変興味深く受講されていました。

次に、これも昨年度からなのですが、稚内中学校のほうで土曜授業を実施しております。5月から2月にかけて月1回ないし2回、計12回実施されておりますが、これについては、文部科学省のほうで児童生徒の教育の一層の充実を図る、土曜日において多様な学習、文化やスポーツ、体験活動等の機会を設けることが必要だということで、土曜に充実した学習機会を提供する方策の一つとして土曜授業というのを進めているわけなのですが、本日、山下校長先生もいらっしゃいますが、大谷高等学校の先生による英語や理科、数学など、それぞれ教科の先生による高校と連携した質の高い体験授業、それと北星学園大学のほうでは、大学と連携した進路学習というのが行われておまして、その大学では体験授業だとか、また、学食でカレーをいただくなど、本当に地域の持つ教育力に支えられながら、子供たちが日ごろ味わえない体験、経験をさせていただいております。

実践校のアンケートによりますと、生徒や保護者の方からは、「いろいろな体験、いろいろな話を聞いたり触れ合ったりすることができた」、また「テレビを見たりゲームをしたりする時間が減った」「生活が規則正しくなったと感じている」など、総じて子供たちにとってこれまで以上に充実した土曜を過ごせたと考えています。

今年度も、それぞれ皆さんのお力を借りながら実施されているところです。

最後に、今取り組んでいる部分で、子供の貧困についてですが、教育の力で貧困、また貧困の連鎖を断ち切るすべはないかというようなことで、現在、教育、福祉、医療の関係団体の皆さんで、この問題について調査研究を進め、課題や対策などについて提言を取りまとめるような、そんな作業を今進めているところです。

これについては、小中学校のほか、高校や大学の先生方にも参加していただいております。特に、大学の先生方には貧困に関する調査だとか提言の取りまとめだとか、先生方の持つノウハウ、大学のネットワークの活用などを通じて、いろいろと協力をいただいているところです。

教育委員会としては、こういった学習支援など学校教育のほかに、社会教育の場面でも親子ふれあいデー、南中ソーラン祭、平和マラソン、大歩こう会など、社会教育の場面でも学生の皆さんにいろいろと協力をいただいているところです。

学生ボランティア派遣事業の関係でいいますと、これまで大学生の派遣を受けた学校のほうからは、学校の要請に応じて、本当に自分たちの勉強や活動もある中で協力していただいていることに感謝をしている、あるいは、児童生徒は勉強面のほか、精神面での成長にも大きく貢献していただいたというお話を聞いております。

また、グングン塾では、参加していただいた学生さんの感想として、「児童の素直な勉強への姿勢がとても印象的であった」、「児童との距離感をしっかりとしたい」、「先生に子供たち全員が引き込まれながら学習をしていて、先生がとても魅力的であった」、「勉強ができる喜びを理解しながら子供たちが一生懸命頑張っていた」など、参加した学生の方はそれぞれにいろいろな感想を持たれたようです。

また、グングン塾の指導員の先生からは、「子供たちも非常に楽しみにしている」「学生の方が研究熱心で研究心が旺盛」「グングン塾の問題集を借りて学習するなど本当に意欲的であった」「子供たちの距離感がとても上手に対応されていた」「本当に年齢にふさわしい力を発揮してくれた」「とても助かった」など、そういう意見もいただいております。

学習支援に当たっては、限られた時間の中でそれぞれの子供たち、個々の習熟度に合わせ、特に低中位層の児童にじっくり指導するには、一人でも多くの大人の力が必要ですが、学生ボランティアのよいところは、子供たちにとって、先ほど大島先生のほうからお話ありましたが、学校の先生よりも年が近い学生との、ふだんとは違った環境での勉強というのが、子供たちの学習に対する意欲だとか集中力を高めることに本当に大きな効果があったと私は考えております。

支援を受ける学校、児童生徒はもとより、このような形で児童生徒とかかわりを持つことは、教師を目指す学生さんもおりますが、本当に学生の皆さんにとって大変貴重な経験の場、機会だったと考えております。

また、子供の貧困については、課題、対策についてこれから提言がまとめられますが、例えば、今後この問題に関して具体的に地域の教育の力で改善を目指していくということを考えると、高校、そして大学との連携は本当に欠かせないことと考えております。

学校教育における今日的な課題に対して、本当に大学に深くかかわっていただいているというのが私の実感であります。こうしたふうにさまざまな事業に取り組んでおりますが、それぞれの事業を進めるに当たりまして、大学の力だとか、地域の力を借りることで、その事業内容というのが本当により豊かになっているなど私は感じているところです。

今後もそういった意味で、大学の力をたくさん借りたいと考えておりますので、ぜひよろしくお願ひしたいと考えております。(拍手)

○齊藤教授 学生が地域活動で行った先のいろいろな具体的な声を聞かせていただきまして、学生にも大いに励みになると思います。ありがとうございました。

では、最後に学長よりお願いいたします。

○佐々木学長 改めまして、本学の学長の佐々木でございます。

今、3人の先生方、あるいはたくさんのお話を聞きまして、最初は私も学生がここで報告したそれを見て、少し自慢話をしたいなと思っていたのですが、ここまで何かうちの大学のことが褒められてくると、ちょっともうこれ以上



言えないくらい、私にとっては本当にありがたくて、とても温かいお言葉の連続でした。ですから、そういう意味でも、私のほうからは何も言うことがないくらいなのですが、別の視点からだけちょっとお話しさせていただきます。

私のことを言いますと、今まで8年間学長をやってきました。今限りで私の任期が完了となりますので、それで11月で学長のほうは退くこととなりますが、学長になって初めて、私、やっぱり何としてもやらなければならないなと思ったのは、市民の方々と大学とのつながりですね、先ほどから先生方いろいろなつながりとかご縁というお話などもいただいています、そのつながりやご縁というものが本当に薄かったなというのが学長になってときの実感だったのです。

やはりこれは大学としてあるべき姿ではないし、大学の本来の建学の精神とは全くかけ離れていると私は思っていました。そこをとにかく直そうという、そういう思いでこの8年間やってきましたが、典型的なことが、例えば学生数という点でいいますと、今よりはもっと学生の数は多かったのですが、それでも学生は、例えば東京や、あるいは札幌方面のほうから、時には大阪、あるいは沖縄のほうからも来るなどがありました。ここで4年間勉強して、そしてどうなるだろうと、結局はここにはほとんどいない形なのです。それで、外へ出ていってしまう形で、当時から最北端は最先端という、これ自身は本学にとっては一つの大きな大切な柱ではあるのですが、育てた学生がいわばIT関係の企業を中心に、やはり全部外に出ていくという形ですね。これ、実は道内各地の幾つかの公立大学等々を見ても、ほぼ同じ状態が繰り返されているということがわかります。公立の大学と私立とは違うということはあるかもしれませんが、大学、特に地方の大学が果たすべき役割は、やはり地域を支える人をいかに育てるのかという、それが一番の大きな使命であり、大学の建学の精神ですので、それをまずやろうと思いました。

そのときに、今、山下先生からのお話もありましたが、これをするときに、例えば私たちの大学でどういう学生を育てるかというときに、今、稚内で非常に人材不足なのです。それで、人手不足のときに、いろいろな技術を持った人が求人として要請されるのですが、私たちの大学は、そういう意味での技術を持った、いわば工学系や理学系の技術を持った学生を育てるということは、私たちの大学での能力に余る部分で難しいのです。でも、一番私たちの大学がやるべきこ

との一つは、情報ネットワークの社会において、いわば IT 企業に就職して行って、そこで活躍する人を育てるだけではなくて、この地域はやはり水産や酪農や、あるいは観光、これが産業の一番の大きな柱なのですね。特に、もう 4 年になります東日本大震災のときに一番私たちが改めて実感したことは、この一次産業というものが私たちの生活の中でどれくらい大切であるのかと。その基盤がしっかりしていて初めて、その上の情報でやっている話ということもある。稚内はやっぱりそれが確かにいろいろな波があって、だんだん小規模化してきてはいますが、やはりこの一次産業、そしてそれにかかわる形での観光と、そういうところで稚内というのは、今後、地方創生をしていく上で大きな柱になっていく。

私たちの大学が情報ということ 키워ドにして学生を育てていくには、やはりそういう産業を支える人たちを育てる。単に IT 企業だけが私たちの大学の供給先ではないわけですし、その意味で、この地域の最も重要な産業を支えるそういう学生を、この情報という点から育成していくという、そういうことがやはり私たちにとっては必要だなと思っています。

その場合の情報というのは、単にコンピューターを使えるとかそういうことだけではなくて、先ほどの白石さんは映像づくりをやっていました。これは私たちの大学で、学生が今取り組んで、いろいろな意味でいろいろなところに出品して、それでいろいろな賞をもらっている、その意味では、とても私も自慢したいなと思っていますのですが、この力というのは、やはり稚内の持っている一次産業なり、あるいは観光なり、これを発信する物すごく大きな力になっているのです。ですから、やっぱりそのところは、私たちの大学が少しずつそういうような意味での地域を支える将来の担い手を育ててきているなという感じを私自身は持っています。

その意味で、私の大学がやるべきことは、そういう地域の発展を支える人たちを支えるのです。そのときに、今まで、先ほど大島先生のほうからお話をいただいた、まちラボのことがありました。まちラボは、実は、私たちは最初、教育ということ余り考えてはいなかったのです。とにかく中心市街地、この町の先を象徴するかのよう、そういう姿に今なっていて、そこを何とかみんなで元気にしようという、そういうような意思で、COC の中では位置づけてやってきたのです。ですから、まちラボは、そのところで新しく駅前再開発や、それから、その中心市街地とのつながりがうまくできていないことを何とかこっちのほうでつないでいきたいという思いで最初は出発して、今もそういう思いでいるのですが、実は私たちの当初考えていたことを超えて、まだいろいろな課題はあるのですが、例えばまちラボに来る子供たちが、自分の居場所を求めてそこに来ることによって自分の居場所ができて、そして、目が輝いてくるようになってくる、そういう話を聞くと、私たちが考えていた以上のとてもうれしいお話になっている。そういう意味で、実は、小中高という、それから大学がその中に入って、これまでの子育ての輪にゼ

ひ大学も入って一緒に稚内の教育に参加していこうといったときことが、私たちが意図しなかったところからも出てきたなという感じがあって、ぜひこれからも、まちラボをそういう形で皆さんも一緒になって何とか支えていっていただければ、私たちとしては本当にありがたいなと思っています。

このCOCの事業は、教育と同時に、先ほど山下先生のお話ありました、まちづくりですね。まちづくりをするときに、観光のまちづくりということもあるし、それから今、中心市街地、そのところをどう大学がかかわっていくのかという意味でもまちづくりですが、やはり大学が、今、情報の話はしましたが、地域に出て、地域が自分たちの学びの場だという、そういうことを大学のCOCをやってから一番大きな柱にしてきたのですね。それで、地域で学ぶと同時に、そして学ぶことによって地域を元気にしていく、そういう担い手に自分たちもなっていくということが、学生たちは随分と頑張ってきています。やはり学校の教育、どちらかといいますとこれまでの高校であれ、小学校、中学校でも、子供の成長時代は、どういふ私たちの意識の持ちようかという、その地域を出て行って、そして外で一旗揚げ、結局は戻っては来ないのですが、そういうのが基本のラインなのです。私もその中で育ってきたということもありますが、やはり外を見る目は必要ですが、今のネットの時代においては、外に出ていっていろいろな経験をするということも大切ですが、この地域の中で学ぶことは本当にたくさんあります。東京にいても、稚内にいても、学ぶことというのは全く同じようにできるというくらいの状況に今なっている。この情報化の時代においてはそれがありませんから、そういうことを考えたときに、ぜひそういうまちづくりというものも大学の中でしっかりと教育をしていきたい。それにかかわる形での研究を、今の若い人たちは随分とそれを始めるようになってきたものですから、それをやっていきたいなと思っています。

そういうような意味で、先ほどから、遠藤課長のほうからは、いろいろな形で大学と稚内市とのつながりが非常に密接になってきたので、これからもとにかく一緒にやっていきたいといろいろな手を差し伸べていただいたこともありますので、私たちもこれからそういう形でぜひ頑張っていきたいなと思っています。

最後にもう一つ、これは蛇足ですが、ちょうど私は今、団塊世代の一番の中心にいるのです。1947年から49年までのこの世代の中で、私は47年生まれでして、それで私たちの世代が、今稚内では65歳以上の高齢化率の部分が、先ほど山下先生が26%という、全国平均ではそうですが、実は稚内はもうそれを超えていて30%も行くところにあります。2020年にはどれだけになるかという、多分36%になるはず。そういうときに、高齢者の人たちが、ただ、先ほど言ったような形で、そういう高齢者のための施設、福祉施設をつくるということだけではなくて、むしろ

その人たちがこういう学校や社会教育、両方の面で子供たちと一緒にかかわって、いろいろな世代がお互いに学び合って、お年寄りそのものも実は自分自身を元気にしていく、教育はそういう源にあるのだと思うのですね。私もそういうような意味で子供たちとかかわって、自分自身、これから元気にやっていきたいなと思っている次第です。

どうもありがとうございました。(拍手)

(この後、フロアからの感想、質問が寄せられました。)

○齊藤教授 ありがとうございました。

ほかにどなたかいらっしゃいませんか。とりあえず、たまたま後で時間があれば伺いたいと思います。

先ほど申し上げましたとおり、この辺もちょっと力を入れてほしいとか、あるいは、実はこういう問題もあったとか、そんなことがありましたら、一言ずつお願いしたいなと思います。先ほどの順番で大島先生からお願いします。

○大島校長 注文ということは特にはないのですが、やっぱり今、ずっとお話しされていたように、おびたしい情報がいっぱい私たちの周りがあるので、真実というか、真に追求するものは何なのかということ、私は学生さんが感じていることを子供たちに伝えてほしいと。一番近い世代の方たちが子供たちに語ってくれると、それが子供たちの心の余白に何かしらのものを綴っていくのではないかと考えていますので、そんな機会として捉えていただければ、きっと皆さんの心の余白にも何か子供たちからメッセージが届くのではないと、そんな感じをしています。

○齊藤教授 山下先生お願いします。

○山下校長 私は、この学校は公設民営というようなことをよく表現するのですが、私は、稚内大谷は市民立的学園と呼んでいる。少し同じような環境にある学校かなと思うのです。ならば、もう少し市民から要望や希望や、何より関心を持てるようなことの活動をもっと積極的にできないかということです。いろいろな観光案内板等の部分でもいろいろ工夫しながらやっているというのも私は知っておるのですが、いわば先ほど言った、私が一次産業の中でどうも付加価値が足りないということを言いましたが、観光の分野で、こちらにある、地域デザインコースというのがございますので、そこら辺の動きというのが十分にとれそうな気がします。観光マップ作成であるとか、稚内の歴史、いわゆる散策コースであるとか、そういうものをどんどん図やマップに表現して、発信元を稚内北星学園大学というようなことでどんどんやっていくことで、より市民

的な活動をして、市民の大学というふうなイメージをつくってくれば、さらにいろいろな意見が出てくるのかなと思うところであります。

もう1点、ちょっとわがままなことを言わせてもらいます。我々高校としては、地域にある北星学園大学を応援したい、また、逆に言うと我々のニーズに合った学部学科ということもひとつ感ずるところであります。今すぐとは言いません。やはりこの大学がこれから先、さらに内容を色濃くするということにおいては、この学科、コースというものをひとつ地域に合ったものとして考えていただく、そんなこともひとつ考えていただければ、我々も非常に直接的なつながりをさらに、稚内から外へ出る連中をとめることにもなるのかなと思いますが、済みません、勝手なことを言いました。

○齊藤教授 ありがとうございます。

遠藤さんお願いします。

○遠藤課長 先ほどもお話ししましたが、学校教育で今進めている、今日的な課題に、本当に大学に深くかかわっていただいております。大学については、幅広い教養だとか専門性を備えた人材の育成ということもあるでしょうし、また、地域や社会の抱える、そういった諸課題解決のためにさまざまな研究を行うという、そういう場でもあると思います。

地域や社会をリードしていくということに本当に大きな期待が寄せられているというふうに私は思っておりますが、まさに地域との連携だとか、地域課題の解決に向けた具体的な形として、今、COC事業でさまざまな取り組みが進められているのだなというふうに思っております。

何かと大変でしょうが、本当に今後も、教育委員会のほうからどんどんいろいろな課題解決に向けていろいろな協力をお願いすることもあるかと思いますが、ぜひ、今後も力を貸してほしいと思っていますし、また、先ほど、藤間先生のほうからもお話ありましたが、市内では北星学園大学を卒業された方がいろいろな場面で活躍をされています。市内の小中学校の先生として本当に活躍されている先生方がたくさんいらっしゃいます。ぜひ、学生の皆さんについては、大学卒業後もできれば稚内に残っていただいて、稚内市のまちづくりの一翼を担っていただければと思っています。

○齊藤教授 ありがとうございました。

学長、何かありますか。

○佐々木学長 私のほうから要望というよりも、今お話しいただいた、例えば山下先生、お話しいただいた市民立というお話は、これはもう入学式の時に私はいつも聞いていて、本当にここにいる私たち、そういうような意味で同じ志を持った人たちがやはりいて、とても力強い支援となっている。そういう中で、私たちで思っただけでも、本当に市民の方々のニーズは何なのか、大

学に対してのニーズは何なのか、あるいは、地域の本当の課題は何なのだろうということを私たちが捉えていっているかという、やはりまだまだその点は不十分だろうと思っています。そういうような意味で、私たちも努力はするつもりですが、遠慮なく大学にそのような要望なり注文をぜひいろいろな意味で出していただければありがたいなと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

(この後、フロアからの感想が寄せられました。)

○齊藤教授 大変力強い励まし、ありがとうございます。今後とも宣伝のほうもよろしくお願ひします。

あとはよろしいでしょうか。

稚内市の姿勢としても、小中高大連携という言葉が普通に言われるようになりました。ただ、恐らくここで紹介してきたようなお互いに支援する、手伝うということだけでなく、小中高大でのカリキュラムの連続性といえますか、教育内容の連続性、あるいは一つのある特定のモデルに向かって何を学んでいけばいいかということの小中高大のレールの中で一緒に考えていく、組み立てていくということがもしかしたら必要なかもしれないと。さっき大島先生のほうから、高校のニーズも聞いてカリキュラムの編成も考えてほしいといったようなことと多分絡んできて、それは今後、本格的に考えていかなければいけないのかなと私自身は思いました。

実はこのシンポ、地域シンポジウムというふうになっていますが、来年度は、大体このぐらいの時期になると思いますが、COC 全国シンポジウムというものを開きます。そこではやはり課題が地域の教育力向上、同じ課題で取り組むものですが、そこでは稚内での成果を披露しつつ、全国の大学とか、それから文科省とか、私学共済の方も呼びながら交流したいと思っています。ですから、それまで本当に自慢できるような経験を、実績をこれからも積んでいきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願ひいたしたいと思っています。

では、ここでパネルディスカッションのほうは終わらせていただきます。

パネラーの方、どうもありがとうございました。拍手で……。 (拍手)

○司会 登壇いただきました皆様、どうもありがとうございました。

閉会挨拶

○司会 以上をもちまして、本日予定しておりました内容は全て終了いたしました。

最後に、稚内北星学園大学 COC プログラムオフィサーの手島孝通閉会のご挨拶をいたします。

○手島氏 こんばんは。今、ご紹介をいただきました、大学 COC 事業のコーディネーター役をやっている手島といいます。閉会に当たって一言お礼のご挨拶を申し上げたいと思います。



本日のこの地域シンポジウムはいかがだったでしょうか。大学を卒業して、現に社会人として今、教壇に立っている若い江戸先生、

そして、今4年生で来年の春には巣立って行って社会人となる一人の学生、それぞれに一生懸命頑張っているこの大学で学んでいましたし、今もいます。彼らの報告、発表に何となく胸が打たれる思いをしました。

今日のシンポジウムのテーマ、稚内・宗谷の未来と担い手づくりの展望、教育という一つのキーワードでこのテーマを考えていくときに、私はこの北星学園大学が果たす役割というのは非常に大きいものだと思っています。学生数は大変少なく、全国でも下から数えて1番か2番を争うほどの小さい大学です。でも、小さくても中身は濃いということを全国に発信できたらいいなと思っていますし、この大学 COC 事業、地(知)の拠点整備というのですが、大学が本当にセンター・オブ・コミュニティ、この地域の拠点になる。それはこの高台の上にあるから、町を見おろせるから偉いのだということではなく、市民の皆さんの心の中に大学がある、そういう大学を今我々の大学は目指しています。

今日のパネルディスカッションで3人のパネラーの皆さん、そして学長からも、この町の未来を担う子供たちをどういうふうに育ていけばいいのかという、また、子供たちに対する熱い思い、希望を語ってくれました。本当に我々にとっては大変ありがたいお話でしたし、このことを聞いて、さらに大学は頑張らなければならないと思いました。

子供は宝、稚内の子供は稚内の宝です。その宝を稚内の皆さん、全ての皆さんで磨いて、磨いて、そして、光り輝く豊かな人間として育てると。これが稚内の町の未来、光り輝く明るい未来を開けてくれる、私はそう思っています。だからこそ、子育て、教育というのは大事なものだと思っています。

今日、このシンポジウムで交わされたたくさんのご意見、そして、大学に寄せられたご提言やご要望、そういうものをしっかりと受けとめて、これからの大学の事業や地域活動の中に根づかせていきたいと思っています。こんなことを言えば、私は学長でも先生でもありませんが、でも、この大学COC事業というのは、そういうためにあるわけです。ですから、このCOC事業を通じて、大学は一度も二度も向けて、本当に山下校長先生がおっしゃったような市民立の大学になる。市民の皆さんがいつでも気軽に大学に来て、あるいは、いつでもうちの大学はと言えるような、そういう大学になりたいと思っています。どうか皆さん方もいつでも大学においでいただいて、叱咤激励をお願いしたいと思います。

地（知）の拠点事業は、今年で2年目、今、2年目の途中です。5年間この事業は続きますが、5年後にも、終わっても、ずっとそのままの形で残っていくだろうと思っています。願わくは、もっと学生数がたくさんいると、もっと地域活動ができると思っています。学生たちはファイト満々で勉強も頑張っていますし、まちは教室ということで、勉強の合間に町に出ているいろいろなことを頑張っています。どうか学生にも、また大学にも、温かい目で見ていただければと思います。

本日は、夜遅くまで長時間、本当にご清聴ありがとうございました。来年の全国シンポジウムもぜひおいでいただいて、たくさんの全国の方と交流をしていただければ幸いですというふうに思います。

本日は本当にありがとうございました。（拍手）

○司会 ありがとうございました。

今のお話にありましたように、来年の全国シンポに向けて今後準備を進めてまいります。つきましては、皆様からのご意見をぜひ頂戴したく、このアンケートにご協力いただきたいと思っております。お時間のある方はぜひよろしく願いいたします。書いていただいたアンケートは、その場に置いていただければ後で回収します。あるいは、後方にも回収口がありますので、どちらかでよろしく願いいたします。

大変外が暗くなっておりますので、お足元に気をつけてお帰りください。

本日はまことにありがとうございました。（拍手）



3. アンケート集計結果

<調査の概要>

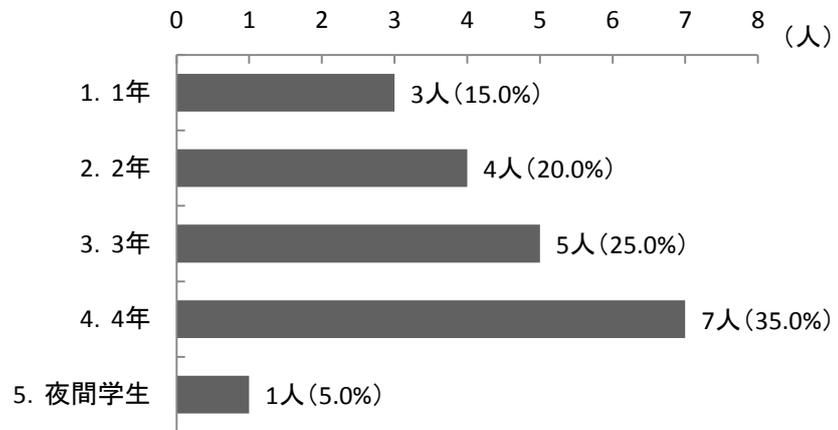
実施年月日	平成27年9月18日
出席者数	82名
調査票回収数	62枚（来場者数に対する回収数の割合 75.6%）

<凡例>

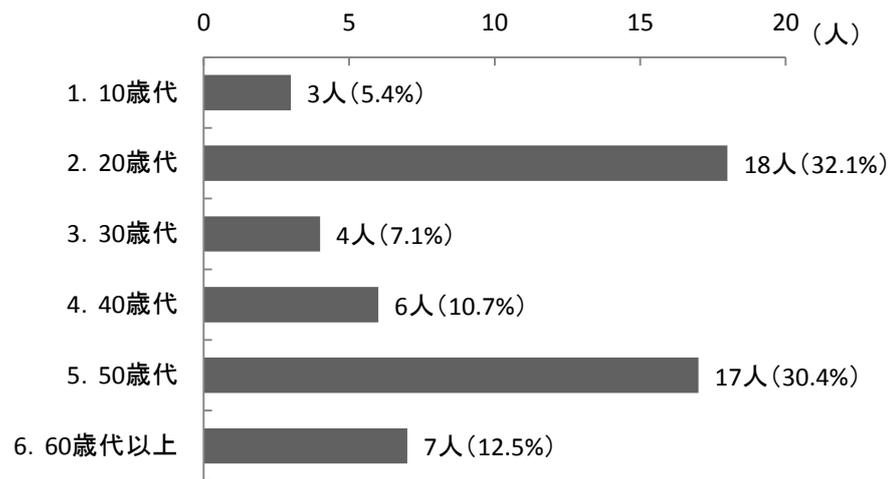
- 1) 当該設問に対する回答数を「n=」で表記した。
- 2) 自由記述については、回答者の意図を損なわぬよう、原則として原文の形で取りまとめた。

(1) はじめにあなたの学年（学生のみ回答）、世代、所属をお聞きします。（各1つに○）

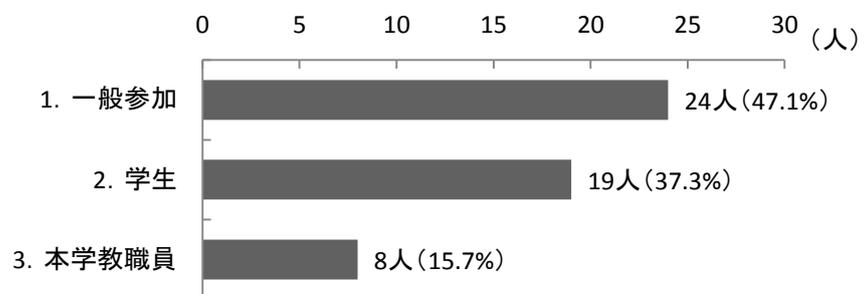
① 学年（学生のみ回答）（n=20）



② 年齢（n=56）

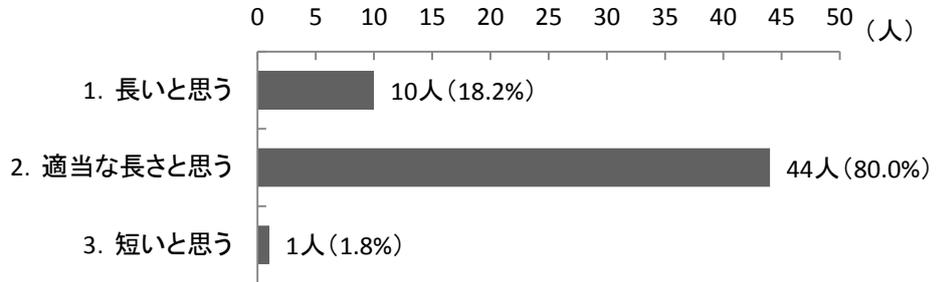


③ 所属（n=51）

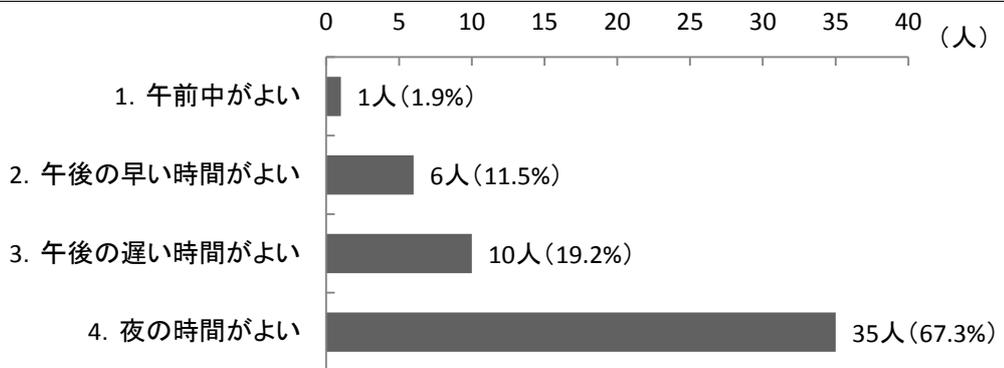


(2) シンポジウムの長さ、開催時間についてお聞きします。(各1つに○)

① シンポジウムの長さ (n=55)

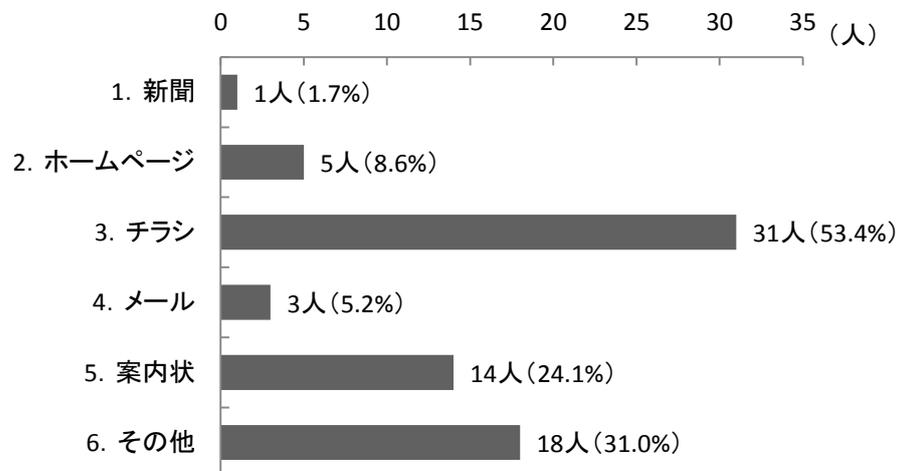


② シンポジウムの開催時間 (n=52)



(3) シンポジウムを何で知りましたか。(複数回答可)

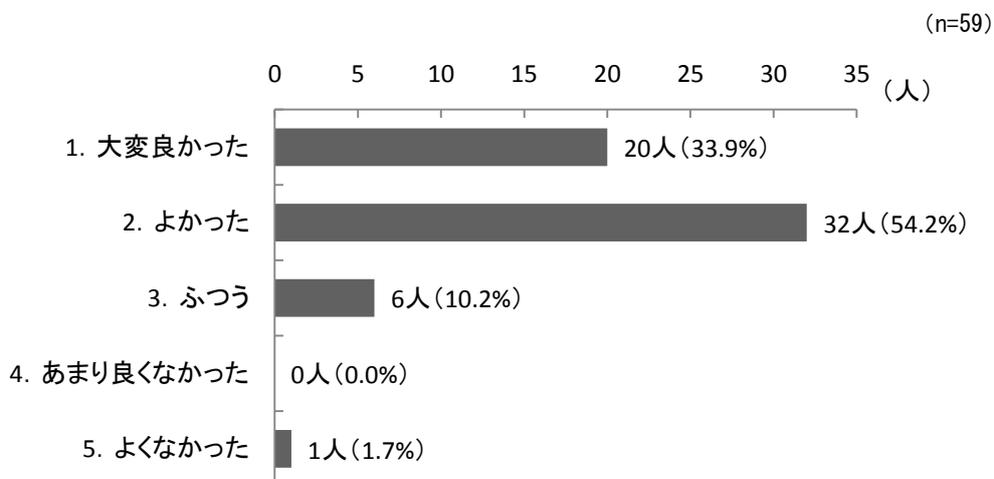
(n=58)



<その他の記述>

- ・教授 (2名あり)
- ・口コミ
- ・講義
- ・授業 (3名あり)
- ・紹介
- ・先生から
- ・知人の紹介
- ・ポスター
- ・友人 (2名あり)
- ・レポート課題

(4) シンポジウムに来てよかったと思いますか。(1つに○)



「1. 大変良かった」を選択した理由 (自由記述)

- ・ 稚内の教育をはじめ、経済などのそして大学の現状がよくわかりました。(一般)
- ・ 日常考えていることが整理できた。(一般)
- ・ 学生のがんばりを知ることができた。地域(稚内)の大学のあり方教育のあり方について考える機会になった。(一般)
- ・ 相互関連の機会として、位置づいてほしいと願っています。(一般)
- ・ 教育の話が多角的に聴けて良かったです。(一般)
- ・ あっという間だったから。(学生, 1年)
- ・ つながりが大切だとわかった。(学生, 2年)
- ・ 大島先生の「つながる力や、つなげる力」という言葉が非常に印象的でした。(学生, 4年)
- ・ 具体的な「まちラボ」の活動成果を聞いた。(学生, 夜間学生)
- ・ それぞれの立場での考えや声が聞けたこと。(本学教職員)
- ・ 実際の活動、実践をふまえた報告というシンポで、本学で大学との関係や役割を発表、発言してくれたことに感動した。(本学教職員)
- ・ 外部からいろんな面でCOCとのつながりができる所にてよかった。学生が今やっていることが小さく見えるかもしれないが、小さいことを重んじて、地域にとりして、とんでもないことになるのではないかと思えてきました。(本学教職員)
- ・ 学生のドキュメンタリーや、卒業生の報告等大変良かったです。
- ・ 今の子どもたちの状態、学校教育と地域、企業連携など勉強になりました。
- ・ 学生の報告が新鮮、稚内の教育情勢にあっていた。

- ・地域で学ぶと共に地域を元気にする大学の姿勢がよく伝わってきたから。

「2. よかった」を選択した理由 (自由記述)

- ・いろいろな立場の人の話、実態をきけたから。(一般)
- ・学生の教育に関する実践や私学での様々な取り組み、考えが聞けたこと。(一般)
- ・大学の事を知った。(一般)
- ・大学の地域活動のようすがわかった。(一般)
- ・地域と大学(学生、社会人)の関係づくりが具体的に見えたこと。(一般)
- ・稚内のかかえている問題にもふれながらそれぞれの立場からの発言があったから。(一般)
- ・大学、大学生の地域活動がこのように行われていることを知れた。(一般)
- ・稚内にある大学が見えない大学から見える大学となり、そして行きたい大学となりつつあること。(一般)
- ・広く話を聞けた大学の成果がみえた。(一般)
- ・町づくりと教育を統一的に考えることができた。(学生)
- ・自分たちの行っている活動の感想を聞くことができた。(学生, 2年)
- ・自分たちの行っている活動が、役に立っていると感ずることができた。(学生, 2年)
- ・自分達の活動が、どれだけ稚内に貢献できているか知れてとてもよかった。(学生, 3年)
- ・もう少し1人の時間を長く、人数が少ない方がよかった。(学生, 3年)
- ・小高行政 各々の視点から教育を考えられたため。(学生, 3年)
- ・自らでは気がつかない、大学が地域に貢献していることや長所を発見できた。(学生, 3年)
- ・大学の活動が地域のためになっていると改めて実感したため。(学生, 4年)
- ・大学の良さを少しは伝えることができたのでは…。パネルディスカッションがとてもためになったからです。(学生, 4年)
- ・地域の大学とは何か、どういったニーズがあるのかについて考えるきっかけになった。(学生, 4年)
- ・COCに選定されてからの自分以外の各分野での実践について知ることができました。(学生, 4年)
- ・学生の学習成果や教育関係者の報告、意見等を聞くことができてよかったです。(本学教職員)
- ・学生の活動報告が聞けたこと。(本学教職員)
- ・学生の活動の内容、取り組みを知る事が出来ました。

(5) 今後、シンポジウムや講演会、報告会で取り扱ってほしい内容や話題（学生、本学教職員は行いたい内容や話題）をお聞かせください。

- ・学生の報告は大学で行われている内容がよくわかるので続けてもらいたいです。
- ・学生の目線から見た「宗谷(稚内)の子どもの未来」を語る集い。
- ・受賞した学生の作品など見てみたい。
- ・大学の各学部の学びの内部や風景、若い人中心の語り合いの場？未来の稚内について等。
- ・社会との実体験及び交流の機会を一層持って裁きその体験論マチラボの貴重な機会を更に広げ深めてからの報告及び講演会等。
- ・子どもの貧困、学力向上、地域連携。(一般)
- ・地域(稚内)が自慢できること、元気のでのる取組みなどを話してはどうか。(一般)
- ・インクルーシブ教育、コミュニティスクール。(一般)
- ・大学の地域にねざす活動を大いに紹介してほしい。大学や学生さんが小や中、高校に望むことがきける内容。(一般)
- ・稚内で行われている活動を掘り起し紹介し(大学だけでなく相互に)、地域を知り、人のつながりを広げる場になってほしいと思います。(きっかけになっていると思う)(一般)
- ・地域社会で一隅を照らしている人を探して話す機会を与えてほしいです。(一般)
- ・活動報告について、集合写真もよいが、実際に取り組んだドリルや、指導上気をつけたこと、工夫したこと(学生だからできたこと)等をもっと詳しく具体的に知りたかった。(一般)
- ・北星大学を卒業して稚内、宗谷で働いている方の実践(苦労話など)を聞きたい。(一般)
- ・学生の活動の報告がもっと一般の方にPRするための内容であればよい。(一般)
- ・地域づくり、活性化・魅力ある街づくりのために・稚内の未来構想。(一般)
- ・今日のシンポでは学生の体験、報告にもっと時間を割いてほしかったです。(一般)
- ・自分育ちと地域育ちの関連。(一般)
- ・人財育成に関する内容や話題についても。(一般)
- ・ボランティアで行ったことの総まとめ。(学生, 1年)
- ・学習支援の内容を今後も続けて行ってほしい。(学生, 2年)
- ・まずCOCなどの大学が取り込む事業についての詳しい説明が欲しいです。(学生, 3年)
- ・教育関連、社会教育主事の活動。(学生, 4年)

- ・稚内北星学園大学の教授たちがどのような研究をしているのかを聞いてみたいです。(学生, 4年)
- ・中央商店街での実践(映像、イベント企画)に関しても取り扱ってほしかったです。(学生, 4年)
- ・北星学園の授業などのPRがほしい。学生の元気な発表が見たい。(学生, 夜間学生)
- ・高校生の声が聞けるシンポジウム。(本学教職員)
- ・本市における第一次産業(農、林、漁業、鉱業等)の現状と展望について・教師のスキルアップ講座。(例:教育相談や教育カウンセリング講座など)(本学教職員)
- ・COC事業で様々な活動に通じて、地域貢献、地域の子供、人たちに与えている事が見えますが、それぞれ活動の中にどのような連携があるのでしょうか。(本学教職員)
- ・本学の学生、教職員の研究の発表の場が、もっとあればと思います。(次回の地域活動報告会も楽しみです)(本学教職員)
- ・教育に関しては、宗谷管内唯一の大学であることに稚内以外の教育機関、学校等はどう考えているのかに関心を持ちました。(本学教職員)

(6) さいごに、メッセージがありましたらお聞かせください。

- ・“まちづくりを教育で”というメッセージが印象的でした。“産業を支える人材の育成”という点では高校でも考えていかなければならないと思ひまして、これまでの大学の印象がガラッと変わりました。生徒の進路先に良いと好感が持てました。ありがとうございました。
- ・こういう機会がありましたらまた参加したいです。
- ・教育関係者と学生が教育や街の未来を考え、学び合うことができた。このシンポジウムはとても元気が出ました。大学の様々な取り組み努力を知ることができたと同時に感謝の気持ちを持ちました。
- ・先行き不透明な教育情勢の中、稚内の教育に少し光を感じました。ありがとうございました。
- ・パネルディスカッションの先生のお話がとても良かったです。学生さん達には今後も活躍されますことを願っております。
- ・各先生方の熱い情熱が伝わり元気と勇気を頂きました有難うございました!!
- ・私が稚内に住んでいた昭和40年代に、なりたい職業を目指すには、高校卒業後は稚内を離れて大学に進むしかなかった。現在、北星学園大学があることが大事であるし、保、幼、小、中、高、大のつながりをもつことができるとよいかと思います。大学生としての視点から、地域のよさや地域が元気になる活動や取組を展開できたら、よいかなあと思います。(一般)
- ・大変有意義な取組みだと思ひます。パネラーの中に社会教育関係者が入ると一層良かったと感じています。(一般)
- ・様々な場面で故郷・地域に貢献している北星学園大学の学生の皆さんに心からありがとうと言ひたいです。これからも誇りをもって学び、活動して下さい。大学が稚内の街づくりに貢献する、小、中、高と連携し、地域のニーズに応える大学教育づくりを始めていることに敬意を表します。我々も一緒になって歩みたいと思わされました。(一般)
- ・4人のパネラーの方々の「未来の担い手づくり」についての提言を聞く良い機会であった。COC推進事業の発展に期待します。(一般)
- ・是非ともこういう事を積極的にやり、つながり・関わりを強くする必要があります。次回は企業の人まじえてやると良いと思ひます。(一般)
- ・地域に根づく人財育成という方針がぶれていないところが素晴らしい。市民にもっと開かれた大学になってほしい。今回のようなイベントを今後も企画して下さい。期待しています。(一般)

- ・ていねいな対応ありがとうございました！子育て運動の街としての地域づくりが進むことを祈っています！（一般）
- ・今回のCOC事業の事を初めて知りました。大学の取組みや活動がまだまだ一般市民の方に知られていないと思います。学校を使ってもよいので、もっと宣伝の方法があるのかなと感じます。期待しています。（まちラボの活動、図書館で一般市民が利用できるなど）（一般）
- ・地域の小中大が連携して地域を担う人材を育成するために今後ともがんばってください。地域のニーズに合った学科、コースをつくることも大事だと思いました。ありがとうございました。（一般）
- ・一般の方の参加が少ない感じがしました。良い取組をしているので、もっと市民に知ってもらいたいと思います。（一般）
- ・地域の大学として、積極的に地域とのつながりを深めようとしている姿勢が感じられ元気になりました。（前半の報告会は良かった）将来の町づくりは人づくりであること、教育機関の連携の向こうに何かできるという光がみえてくる感じがする。シンポジウムでした。（一般）
- ・多くのことを仕掛けていかれていることがよくわかりました。考えなければならない課題がいろいろ提示されておりおもしろかったです。学生さんの報告もよかったです。ありがとうございました。（一般）
- ・地域とつながっている大学としての役割は非常に大きいと思います。今後も、経営含め、大変なことも多いと思いますが、活動に期待していますし、地域に貢献する人々、子供達への教育の力に期待しています。応援していますし、参画もしていきたいと思います。（一般）
- ・何をしているかわからない大学から見える大学になり、行きたい大学になっていくことが大学の努力。そして稚内の努力は大学を育てること子どもたちにとってあこがれとなる大学となるよう支援すること。そして育てた人材が残れる雇用を創出することという双方の努力が必要だと思います。稚内の子育て運動は幼保小中高そして大学生を育てる運動であると思いました。（一般）
- ・未来に向けた話し合いを広げたいですね。（一般）
- ・教育—共育—供育—協育⇒COC。（一般）
- ・学生、卒業生の地域に対する思いや考えがすばらしかったです。（一般）
- ・有意義なシンポジウムだった。（学生，1年）
- ・地域の教育活動に関わる方々が、大学やまちラボに抱く要望を聞いて、地域の問題解決という目標が、大きなものであり、もっと関わっていかなくてはならないことだと再確認しました。私にできることでこの問題に関わっていければと思いました。（学生，1年）

- ・放送後の指導や無料塾など、先生になったら大変でできないことを、学生がやるということはとてもよいことだし、子どものためにもなるし、こういう連携の仕方があるんだと思いました。(学生, 3年)
- ・人が少ない。もっと人があつまれる場所で行うことができたらもっとCOCについて稚内の人に理解してもらえると感じました。(学生, 4年)
- ・自分は社会教育を学んでおり、他の学生がやっていること、研究していることに関して自分のアンテナが小さくなった(話を聞く機会が少なくなった)ので、今回のような会に参加し、各分野でどのようなことを行ったかを知ることができた為、とても有意義な時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。(学生, 4年)
- ・教育機関なのでまじめでカタイのはあたりまえだが、市民に対してのアピールなので、もっとくだけた内容の発表、アトラクションも、良いのではないか?(学生, 夜間学生)
- ・私学の大谷高、北星大学の建学の精神はどのような背景のもとでつくられ、決められたのか気になり、知りたくなりました。(学生)
- ・子育て運動とは、すべての子どもたちの健やかな成長のために地域の大人総ぐるみで一致して力を合わせるのだと思います。そこに大学が加わるということは総ぐるみとなる大人に大学生や研究者も位置づいていくということだと思いました。改めて、子育て運動の可能性の大きさや、それが展開されているということは本当にすごいことだと感じました。(学生)
- ・「教育はオール稚内！」という動き(輪の中)に本学も加わってきているなという実感をもつことができたシンポでした。企画、運営にあられた先生方ご苦労さまでした。(本学教職員)
- ・夜の時間帯だと、パネリスト3人の方が話をじっくり聞くことができるのかな?・教育関係者の方々のお話は、もっと学生にも聞いてもらいたいです。内容はもちろんですが、発表のしかたなども学ぶことができると思います。このようなシンポジウム、もっと市民の皆さんにも聞いてほしいです。(本学教職員)
- ・パネルディスカッションは、具体的なテーマがあった方が良いのでは。(本学教職員)

資料 (アンケート調査票)

アンケート

< お願い >

- このアンケートは、COC推進事業の推進と地域活動報告会の充実を図る目的で、参加者の皆様の感想やご意見をお伺いするものです。
- このアンケート調査の結果は、集計して利用され、個人を特定することはありません。
- このアンケートにより得た情報の管理は、個人情報保護規程等に則り、COC推進委員会が適切に行います。ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

以下、6点お伺いします。該当する番号に○を付け、自由記述に感想をお書きください。

(1) はじめにあなたの学年(学生のみ回答)、世代、所属をお聞きします。(各1つに○)

- ① 学年(学生のみ回答) 1. 1年 2. 2年 3. 3年 4. 4年 5. 夜間学生
② 世代 1. 10歳代 2. 20歳代 3. 30歳代 4. 40歳代 5. 50歳代 6. 60歳代以上
③ 所属 1. 一般参加 2. 学生 3. 本学教職員

→ ③で“1”を選択された方にお聞きします。
具体的な所属を教えてください。(例：高校教諭)

(2) シンポジウムの長さ、開催時間についてお聞きします。(各1つに○)

- ① シンポジウムの長さ 1. 長いと思う 2. 適当な長さと思う 3. 短いと思う
② シンポジウムの開催時間 1. 午前中がよい 2. 午後の早い時間がよい 3. 午後の遅い時間がよい
4. 夜の時間がよい

(3) 今日の報告会を何で知りましたか。(複数回答可)

1. 新聞 2. ホームページ 3. チラシ 4. メール 5. 案内状 6. その他()

(4) シンポジウムに来てよかったと思いますか。(1つに○)

1. 大変良かった 2. よかった 3. ふつう 4. あまり良くなかった 5. よくなかった

理由をお聞かせください： _____

(5) 今後、このようなシンポジウムや講演会、報告会で取り扱ってほしい内容や話題(学生、本学教職員は行いたい内容や話題)をお聞かせください。

(6) さいごに、ご感想やメッセージがありましたらお聞かせください。

< ご協力いただきましてありがとうございました >

資 料

テーマ

稚内・宗谷の未来と担い手づくりの展望

子育て運動の街における力あわせと大学育ち

COC地域 シンポジウム

- 卒業生・学生からの報告**
- 江戸 勇介 (稚内大谷高等学校教諭 H26年度卒)
 - 白石 拓也 (稚内北星学園大4年 (社会教育))
 - 上浦真之介 (稚内北星学園大4年 (学校教育))

- パネルディスカッション**
- 山下 優 (稚内大谷高等学校校長)
 - 大島 朗 (稚内中央小学校校長)
 - 遠藤 直仁 (稚内市学校教育課課長)



稚内北星学園大学は文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に選定され、稚内をはじめ宗谷管内の自治体・関係団体と連携し、地域の課題解決に向けた「地域志向研究」と「地域貢献支援事業」に取り組んでいます。今回、地域における大学の役割を、「教育」を軸にして考える第1回シンポジウムを開催します。

ラボちゃん

まちなか振興の拠点「まちなかメディアラボ」(稚内中央商店街の空き店舗活用)のイメージキャラクター。



2015.9.18 (金) 18:30 ~ 20:30

会場 / 本学新館 1401 教室 **誰でも参加できます (無料)**

後援 / 北海道教育庁宗谷教育局 稚内市教育委員会 宗谷校長会

947-0013 稚内市若葉台1丁目 2290-28
TEL: 0162-32-7511 FAX: 0162-32-7500
MAIL: info@wakoh.ac.jp
HP: http://www.wakoh.ac.jp/



地(知)の拠点



稚内北星学園大学
Wakkanai Hokuetsu Gakuen University

Press Release



地(知)の拠点



稚内北星学園大学
Wakenai Hoshu Gakuen University

報道関係者各位

平成 27 年 9 月 10 日

本学で COC 地域シンポジウム を開催します

稚内北星学園大学（学長 佐々木政憲）では、9月18日（金）20時半より2時間の予定で、事業の進捗状況・問題点を地域と共有するために、本学新館 1401 号教室で平成 27 年度 稚内北星学園大学 COC 地域シンポジウム「稚内・宗谷の未来と担い手づくりの展望—子育て運動の町における力合わせと大学育ち—」を開催します。

- 本学では文部科学省地（知）の拠点事業の採択を受け、宗谷地域、とりわけ稚内市及び利尻町との連携を深め、地域の教育力向上とまちづくりで協働する地の拠点を目指していくこととなりました。
- 当該事業の進捗状況や問題点を共有し、事業の一層の改善を図るため、事業2年目、4年目に「地域シンポジウム」を実施する予定としており、その第1回目を開催いたします。
- 事業2年目の「地域シンポジウム」では、「教育」を軸として、「稚内・宗谷の未来と担い手づくりの展望—子育て運動の町における力合わせと大学育ち—」と題し、市内3名の教育関係者にご登壇いただいて、本テーマについて議論いたします。
- ご登壇いただくのは、山下優氏（稚内大谷高校校長）、大島朗氏（稚内中央小学校校長）、遠藤吉仁氏（稚内市教育委員会学校教育課長）で、それぞれのお立場から大学の役割として期待されること等について語っていただきます。また、本学学生2名と市内で教師として働いている卒業生も、本学での取り組みの紹介や学んだことについて発表します。
- 来年は、今年の内容を踏まえつつ、同じく教育を軸にして全国シンポジウムを開催いたします。
- この機会に、地域の皆様との連携が加速することを期待しています。
- 稚内北星学園大学とともに「地域の教育のありかたや、大学の役割を考えたい」「教育に関する大学の取り組みを知りたい」という皆様、「稚内北星学園大学について知りたい・興味がある」という皆様方に、ぜひ出席いただければと思い、今回リリースさせていただきました。

お問い合わせ先

稚内北星学園大学 COC 推進委員会

〒097-0013 北海道稚内市若葉台1丁目 2290-28

電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500

E-mail : info(〒)wakuhok.ac.jp ※〒は@に変更してください

担当：三浦・鏡山・米津

問い合わせ先

稚内北星学園大学

COC推進委員会事業推進室（事務局総務課）

〒097-0013 北海道稚内市若葉台1丁目2290-28

TEL 0162-32-7511

FAX 0162-32-7500

E-mail info@wakhok.ac.jp

わくほくCOCホームページ

<http://coc.wakhok.ac.jp/>

執筆者 米津 直希

第1章 シンポジウム総括

COC推進委員会平成27年度地域シンポジウム実施報告書編集小委員会 委員一覧

齊藤 吉広（学長／教授／事業推進代表者）

米津 直希（講師／地域教育支援室長）

黒木 宏一（講師／事業推進室長）

高 澍（特任助教／学習コンシェルジュ）

中野 窓香（メディア表現指導員）

平成27年度COC地域シンポジウム実施報告書

2016（平成28）年1月15日発行

編 集 COC推進委員会平成27年度地域シンポジウム実施報告書編集小委員会

発 行 稚内北星学園大学 COC推進委員会
〒097-0013 北海道稚内市若葉台1丁目2290-28
電 話：0162-32-7511（代表）
メール：info@wakhok.ac.jp

無断転載を禁じます。